

25 戦前合州国に留学した精神病学者

—松原三郎、齋藤玉男、石田昇ほか—

岡田靖雄

戦前のわが国の精神病学はドイツ精神病学の流れをくむものであったが、戦前に合州国に留学した精神病学者もかなりおおい。しらべた範囲でそれらの人をみていこう。

—松原三郎(一八七七—一九三六)、金沢医科大学教授。高峰讓吉の話しをきいて合州国留学をこころざす、私費(前半苦学)。一九〇三—〇九年、ワード島病理学研究所(マンハタン州立病院)(アドルフ・マイヤ)。途中からドイツにいく予定が、マイヤに魅せられてそこをつづける。神経病理。その勤勉さ・誠実さをマイヤに印象づけた。帰国して、クレペリン体系に批判的。

齋藤玉男(一八八〇—一九七二)、日本医科大学教授、東

京府立松沢病院副院長。一九一四年ドイツに留学し、大戦勃発で合州国にわたった。野口英世の紹介をえて一九一四—一六年とジョンズ・ホプキンス大学(マイヤ)。私費。神経病理学。のち、社会精神医学面の自由な発言。

杉田直樹(一八八七—一九四九)、名古屋大学教授。一九一三—一四年とドイツ、大戦で帰国。一九一五—一八年とマンハタン州立病院病理学研究所(ホホ)、ウイスタ解剖学研究所(ドナルドソン)。神経病理学。

丸井清泰(一八八六—一九五三)、東北帝国大学教授、弘前大学学長。一九一六—一九年とジョンズ・ホプキンス大学(マイヤ)。神経病理学。帰国して精神分析学を導入。

石田昇(一八七五—一九四〇)。長崎医学専門学校教授。一九一七—一八年とジョンズ・ホプキンス大学(マイヤ)。分裂病を発して同僚を殺害して有罪。一九二五年帰国。

松本高三郎(一八七二—一九五二)、千葉医科大学学長。一九一七—二〇年とジョンズ・ホプキンス大学(マイヤ) ↓ロンドン市精神神経病理研究所。神経病理学。

植松七九郎(一八八八—一九六六)、慶応義塾大学教授。一九一八—二二年とボストン州立病院病理学研究所、ハ

ーヴァード大学。神経病理学。のち精神衛生運動にたずさわる。

小峯茂之(一八八五—一九四二)、王子脳病院院長。一九一八—一九年とウイスタ研究所(下ナルドソン)。神経化学。

松村常雄(一九〇〇—八一)、名古屋大学教授、国立精神衛生研究所所長。一九三三—三五年とロクフェラ財団医学研究生として、ハーヴァード大学。戦後、動態(力動)精神医学導入のきっかけをつくった。

これらのほかに、野田浦弼(京都府立医科大学)が一九一七年に、また永坂源一、水津信治も、合州国に留学している。

当然のことながら、第一次大戦期に合州国に留学した人がおおい。それにさきだつて、マイヤに魅せられてその所に腰をおちつけ、しかもその仕事・人柄を評価された松原が、日本人の精神病学者をうけいれやすくする素地をつくっていたのだろう。

留学した精神病学者をならべると、わが国の精神病学におよぼしたマイヤの影響はおおきい。アドルフ・マイヤ(一八六六—一九五〇)はスイス生まれで、ツューリヒ、

ロンドン、パリにまなんで合州国にうつった。精神生物学を唱導したマイヤは、のちの動態精神医学の基礎をつくった。なお、外国の医学者を評価するばあい、日本人の医学者をそだてた人にもっと関心をむける必要がある(たとえば、ウィーンのハインリヒ・オーベルштаイネル)。

石田はこのち松沢病院で生涯をおえた。かれは、戦前にもすくなくかつた留学生の精神疾患という問題をおおきく提起している。

さて、戦前の合州国に留学した精神病学者たちは、ドイツ精神病学にそうわが国の精神病学をおおきくかえることはなかつたが、戦後における動態精神医学受け入れへのある程度の土壌づくりをした、とまとめることができよう。

(精神科医療史研究会)